

学寮におけるディベート空間の平面計画に関する一考察

— 四施設を事例として —

日大生産工(院) ○劉 之渝 日大生産工 古田 莉香子
日大生産工 広田 直行

1. はじめに

1.1 研究背景と目的

学寮, もしくはカレッジと呼ばれるものの起源は, 12世紀後半のパリに遡ることができる。学寮の歴史的展開からみると, 学寮は教員と生徒が共に生活する場所と同時に, 学問のことについて交流し, 勉学する場所でもあった。つまり, 学寮を生活する場だけでなく, 教育, 学びの場として捉える必要があると考えられる。一方, 日本では, 明治時代以降, 遠距離から通学している学生が学寮の中心となっていったため, 学寮が居住施設へと転換した結果, 学びの性質が薄れてきている¹⁾。そこで, 現代の学寮に学びの空間を確保する必要があると考える。そこで, 本研究は学寮を教育の場所として捉える場合, ディベート空間の平面計画について考察することを目的とする。

1.2 研究対象と方法

研究対象としてまず教育施設であることが大きな枠組みであると考えられる。それに施設側が意図して学生の学びのために設置された寮かつ共有空間, もしくは共有施設が充実している学寮を対象とする。一つのモデルケースとして, 東京都江東区にある「東京国際交流館」が挙げられる。「東京国際交流館」は日本学生支援機構が設置し, 国内外の大学院生や研究者等に質の高い生活, 交流空間を提供することを意図して作られた施設である²⁾。そのため, そこには生活以外に, 研究する場所, いわゆる学びの空間も考慮されていると考えられる。それに, グローバル化していく社会背景の中で, 「スーパーグローバル事業」に採択された37校より, 学寮を教育の場として位置付ける事例を加える。研究対象は表1に示す4つの施設7つの建物である。各施設の図面はホームページや入寮ガイドブックなどに公開されている資料を参照し, 筆者が作成した図をもとに平面計画の考察を行う。

表1 調査対象の概要

所有者	施設名称
東京国際交流館	単身棟 A, B 棟
国際教養大学	こまち寮
国際基督教大学	樫(もみ)寮, 楓寮
立命館アジア太平洋大学	AP ハウス 1, 2

2. ディベート空間の必要性

2.1 学寮の歴史と発展

12世紀後半に, ノートルダムの教会参事会が貧困学生のために作った援護施設「18人学寮」(College dex Dix-Huit)は最初の学寮とされている。後には, 多くの後援者から基金や書物などの財産が遺贈されるものが出現し, 貧困ではない学生も含め, 学生の学業のための寮舎がカレッジと呼ばれるようになっていった。そして, 13世紀後半の英国では, 学寮は学生が生活する場であると同時に, 個人指導中心の授業を受け, 自習する場でもあり, 教職員がともに住んで生活規範を含めた人格的教育を成すところとなっていた³⁾。このような歴史的な流れを遡ると, 最初の学生寮は生活と学びを両立させるために作られる場所であることがわかる。

2.2 ディベートの必要性と効果

学寮は様々な学生が切磋琢磨し, 教養を高める場所であり, 近年, 外国人留学生の受け入れ環境作り, 日本人学生を寮内留学体験させるなど, 学寮に入居する学生が多様化してきている。専門, 文化, 国籍, 言語ないし信仰がそれぞれ異なる学生たちが同じ軒下で生活するも様々な衝突が生じざるを得ないと考えられる。しかし, それらの衝突は避ける必要がなく, むしろその交流や意見交換の過程により, お互いの見識が広がり, 学校では決して学べない学びが生じることが多々あると考えられる。この現象を本研究ではディベートと定義し, ディベートをすることにより, 学生の思考力, 言語力, コミュニケーション能力の向上ないし学生の国際性向上をはかる効果が期待されている。

A Study on the Floor Plan of Debate Spaces in Dormitories
— A Case Study of Four Facilities —

Zhiyu LIU, Rikako FURUTA and Naoyuki HIROTA

2.3 ディベート空間の位置付け

現代の学寮は教育の場としての役割を見直す時に、ディベート空間というものは重要であると劉は前稿⁴⁾で述べている。また、ディベート空間の定義として、まずは共有空間であることが前提で、その空間で以下の行為が行われると想定される。

表2 ディベート空間で想定される行為

意見交換が行われる
学問交流により学びが生じる
異文化交流による学びが生じる
学生の人格形成に役立つ

3. 各施設の平面計画

3.1 東京国際交流館—単身棟A棟, B棟

東京国際交流館（以下TIEC）の単身棟A棟B棟は全体的にリニア型になっており、1階部分は所々に全体共有施設が挿入されている。A棟の南側には自習室B、相談室、調理実習室、茶室があり、北側には自習室Aと日本語研修室が設置されている。B棟の南側にはミーティングルーム、美術室、製図室があり、北側には音楽室AとBが設置されている。これらの空間以外ではピロティー空間となっている。2階以上は片廊下型の居住階になっており、A棟ではテラス、ラウンジ、食事室、洗濯室、B棟ではラウンジとテラスが共有空間として設置されている。テラスとラウンジは隣接しており、2階から14階まで通してランダムに配置されている。

TIECのディベート空間は主に1階部分に集中しており、日本語研修室や茶室といった機能空間を利用したい場合は1階へ行かなければならない。2階以上の洗濯室と食事室は特定の機能を持ち、使い方が制限されているが、ラウンジとテラスは利用目的に関係なく、幅広い使い方に対応している以外、2階分ないし3階分の住戸を繋ぐことに大きな役割を果たしている。

3.2 国際教養大学—こまち寮

国際教養大学（以下AIU）のこまち寮は1階部分の南側に共有空間、北側に居住空間を設けている。共有部分には、テラス、和室、湯沸室、共同キッチン、ロビー、メールコーナー、ホールなどの空間が共有施設として設置されている。テラスは共有部の東側と西側に1つずつ設置されている。室内ではロビーが一番広々とした空間で、その次に広いのが共同キッチンである。和室と湯沸室は共に共同キッチンの南側に配置されている。居住部分では中廊下型と片廊

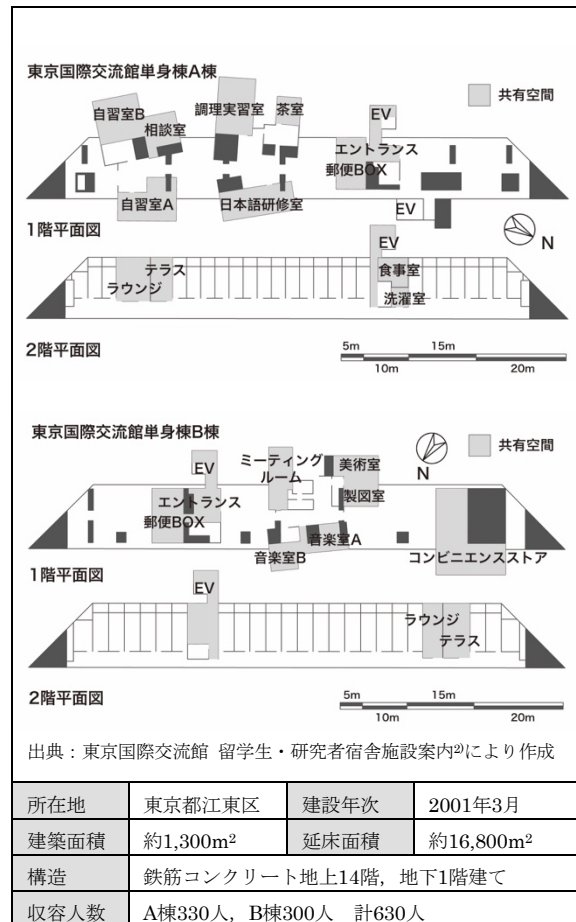


図1 東京国際交流単身棟A, B棟の平面図と概要

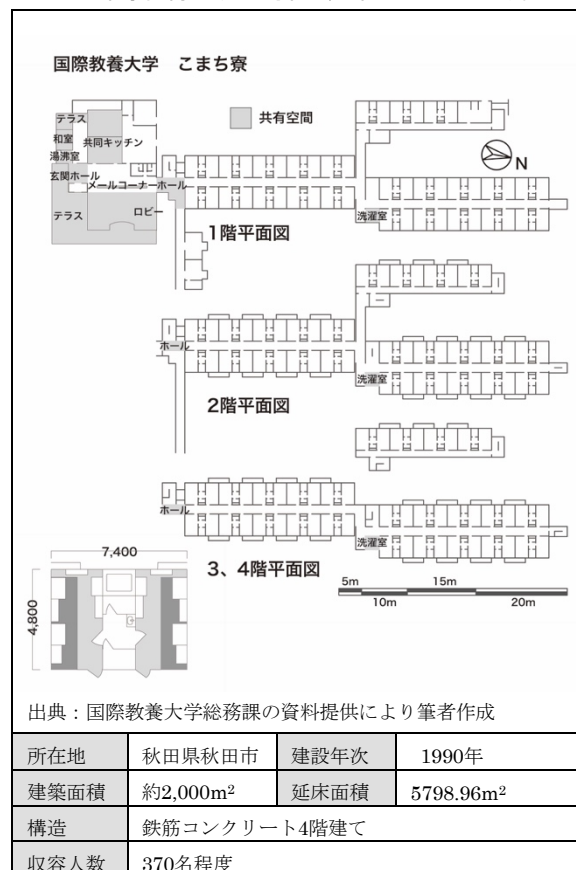


図2 こまち寮の平面図とハウジングプラン

下型があり、2人で共有する部屋が並列に配置されている(図2)。2部屋の真ん中には洗面所や、トイレ、お風呂などが設置されており、4人で共有するスペースとなっている。2階から4階は居住階であり、ホールと洗濯室が共有施設として各階に1箇所ずつ配置されている。

こまち寮 1階の共有空間以外にホールと洗濯室が設置されているが、ホールは面積が小さく、洗濯室は利用時間が短いと考えるため、どれもディベート空間として利用されにくいと考えられる。ただし、2部屋の中に設けられている共用部分での交流が発生すると考えられるため、そこはディベート空間の可能性が窺える。

3.3 国際基督教大学—縦寮、楓寮

国際基督教大学(以下ICU)の学寮はL字形をした建物2棟で構成されており、互いに点対称的に位置してある。学寮の1階は、北棟と南棟が繋がっており、行き来することができる。2階以上になると、北棟が楓寮で、南棟が縦寮という仕様に分かれており、行き来することができなくなる。1階の北側にはセミナールーム、ラウンジがあり、南側には共同リビング・ダイニング(ウイステリアホール)、浴室と和室が全体共有施設として配置されている。セミナールームは西側に4つ、東側に2つと大小合計6つ配置されている。南棟ではガーデンに面して、和室と共同リビングが配置されている。2階以上は片廊下型の居住階となっており、両棟共通の共有施設として、ランドリー、シャワールーム、トイレ洗面台、ソーシャルルーム、キッチン・ダイニング、スタディールーム、物干し場が配置されている。水回り関係は主に廊下に配置されており、廊下の両側にスタディールームが1箇所ずつ配置されている。キッチン・ダイニングは曲がり角の位置に配置されており、その隣はソーシャルルームである。

縦寮と楓寮は1階に全員が使えるような共有空間があり、居住階にはスタディールーム、ソーシャルルームや共同キッチンといった様々な用途に対応した機能空間が設けてあるため、全体的にバランスよくディベート空間を配置していると考えられる。毎階32名と比較的に少人数で構成されており、誰でも気軽にディベート空間を利用できると考えられる。また、ICU学寮特集⁶⁾によると、浴室は学生の要望に添えてつくられた施設で、コミュニケーションの場として人気を得ているとの記載がみられるた

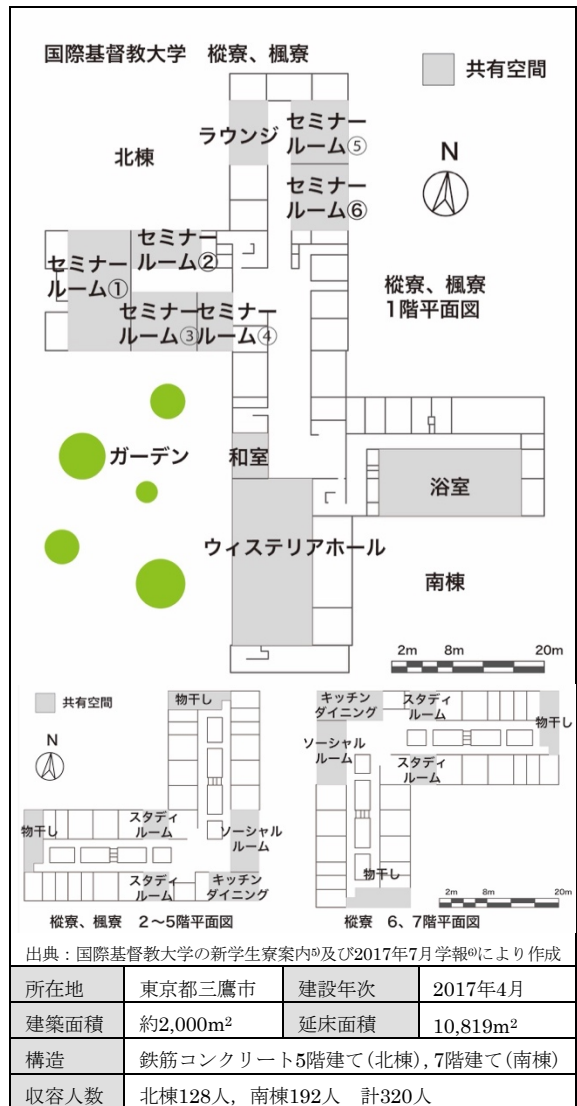


図3 縦寮と楓寮の平面図と概要

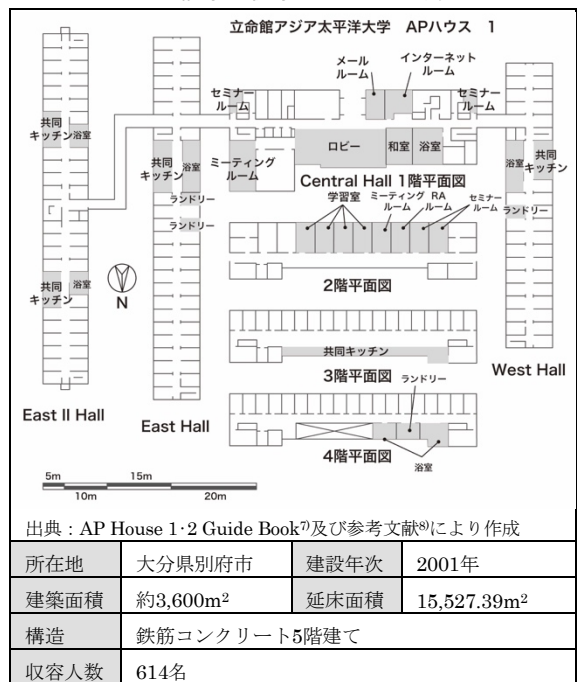


図4 こまち寮の平面図とハウジングプラン

め, ICUにおける浴室もディベート空間1つの可能性として窺える。

3.4 立命館アジア太平洋大学-APハウス

立命館アジア太平洋大学(以下APU)のAPハウスはAPハウス1と2に分かれており、それぞれ分散した建物4棟で構成されている。建物はAPハウス1ではセントラルホール(以下CH), ウェストホール, イーストホールとイーストIIホール, APハウス2ではミドルホール, レフトホール, ライトホール, ライトIIホールと名付けられている。APハウス1の1階部分にはミーティングルーム, ロビー, メールルーム, インターネットルーム, 和室と浴室が共有施設として設置されている。APハウス2の1階部分にはロビー, メールルーム, インターネットルーム, APホール, APキッチン, 和室と浴室が設置されている。他のホールは共同キッチン, 浴室とランドリーが設置されている。2階以上は中廊下型の居住階となり, APハウス1と2のCHには学習室, ミーティングルーム, セミナールーム, RAルーム, 共同キッチンが設置されている。

APハウスは大概の全体共有施設をCHの1階部分に集約しており, 他の3つのホールにはそれぞれキッチン・浴室・ランドリーをセットで配置している。APハウス1と2はともに1階だけ4つのホールが繋がっており, 全ての学生がディベート空間を利用できるようになっている。2階以上に上がると, 4棟で建物が独立となり, CHには主に学習室やセミナールームといった勉強スペースがみられる。その他, ほぼ全ての階において, 共同キッチンと浴室が設置されているのがAPハウスの特徴であることがわかる。ICUと同様に, キッチンと浴室もディベート空間としての可能性が窺える。

4. まとめ

本稿は各施設のホームページ等に記載されている資料をもとに, 平面計画について考察を行うことにより, 以下の3つのことが明らかになっている。

①4施設は全て1階の共用部分に様々な用途に対応するディベート空間を設置している。

②2階以上の居住階はディベート空間も設置されているが, 比較的に単一的な種類となっている。

③水まわりやプライベートの空間もディベート空間となりうる。

また, 今回はあくまでも平面計画から考察を行ったが, ディベート空間の利用者や利用目的, どのような行為が取られているのかに関しては資料から読み取れることが厳しいと考えるため, 今後は実施調査や, 寮の管理者によるヒアリング調査を行い, ディベート空間の実際の利用状況と今回の分析結果を統合して調査する必要があると考える。

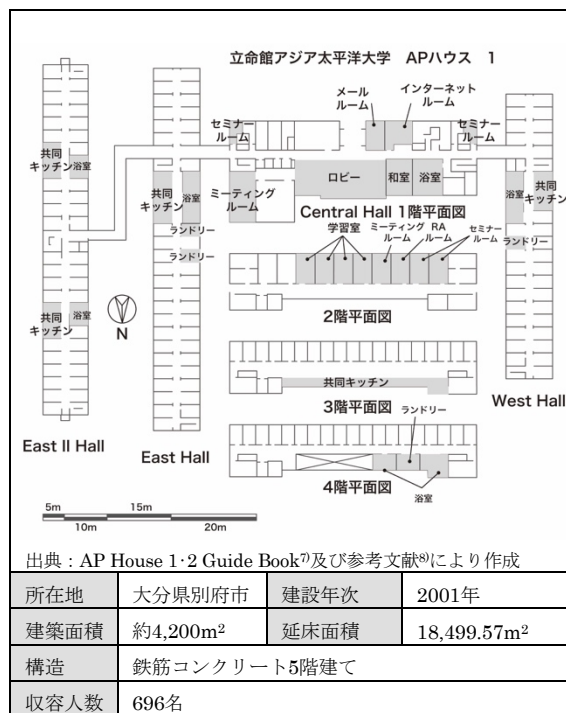


図5 APハウス1, 2の平面図と概要

参考文献

- 1) 谷岡 郁子, 大学コミュニティとキャンパスデザイナー-人間の生活・知的交流支援装置の変遷とその条件, キャンパスマネジメントハンドブック pp53-54, 日本建築学会, 2004年9月
- 2) 東京国際交流館 留学生・研究者宿舎施設案内 pp1-17, 独立行政法人 日本学生支援機構 同1)
- 3) 劉 之渝, 学寮におけるディベート空間の概念と定義に関する一考察, 日本大学学内学術梗概集, 2021
- 4) Guide to New Student Dormitories pp2-3, 新学生寮のご案内, 国際基督教大学 学生サービス部 ハウジングオフィス
- 5) 「The ICU」学報No.40 pp4-14, 国際基督教大学 アドヴァンスメント・オフィス
- 6) AP House 1・2 Guide Book pp66-69, 立命館アジア太平洋大学 APハウス・オフィス
- 7) 石井 香也子, 混住型学生寮の共有空間における学生館交流に関する研究, 日本建築学会九州支部研究報告第59号, 2020年3月